
あの日の続き

maki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日の続き

【Nコード】

N9297N

【作者名】

mak i

【あらすじ】

全てが終わった後、語られることのなかった裏やこれから・・・
・Death troyer, Death and God, Last Shotの続きです。

書きたいから書いただけの作品となっています。

前書きらしきもの

大した理由はないんですよ、ただ少しばかりの「後日談っぽいのを書いて欲しい」という感想が来たときにたまたま自分の頭の中にはそういうプランが浮かんでいたので書いたんです。

基本的には全部の話が短めで一話完結で、タイトルになっている人間の心中だったりその後だったり書いたりしました。大していい出来じゃないです。もっと時間をかけたかったのですがなんとなくこのシリーズを完全に完結させたかったというのがはつきりとした理由なんです。

そんなこんなでいい加減に作られた作品はいい加減な理由で終わったりするというわけでして、高いクオリティを求めることなくかろく読んでくれれば嬉しいです。はい、

出来杉英才（前書き）

暗いです．．．．．

出来杉英才

のび太が去った後の部屋は異様なまでに広く感じられた、言われたことひとつひとつが忌々しく頭にこびりついて残っている感覚は彼にとっては屈辱以外の何でもなかった。

「なんだってんだ………どうもこいつもよお！」

いくつかの成果が上がれば利益に繋がる、例え今1000人死んでも1000人の犠牲の上にはきつと無限の救済が成り立つ。

そう出来杉は信じて疑わなかった、それがアンブレラがもたらした災厄の元凶となった思想だということに最後まで出来杉は気付かなかった。出来杉にとつての永遠の命はそういった意味を持つ、出来杉は最終的に実験を繰り返し続けて地球の人口が10人程度になつてしまつても、永遠の命を手に入れる技術を手中に収めるためならいた仕方のないことだと思つていた。

人は死んでも増え続ける、だつたらどんどん実験体にしてもつと増えるようにしたらいいんだ。

思惑は全て碎かれた。今の出来杉には何も残っていない、のび太のどこまでも純粹な正しさを証明するための引き立て役にも及ばない負け犬に成り下がった。

負け犬、負け犬と壁から自分を馬鹿にする声が聞こえた出来杉は誰もいない壁に向けて怒鳴った。

「黙れ！僕はお前らのようになりたくなかったただけだ！いつまでも同じ場所に安住できると思つていつまでも椅子に座るだけのお前ら

とは根本的な箇所から違うんだ！僕は負けてなんかいない！」

返す者は誰もいない、叫びは虚しく部屋に反響し続けた。

出来杉に執行される刑は電気椅子に決まっていた。数人の大柄な男が部屋から高速衣の出来杉を持ったまま出ていく、出来杉には遺言や最後の言葉を遺すことさえ許されていなかった。

「はっ、これがお前らにとつての極刑か！ずいぶんとチープでありきたりな方法だ！僕を苦しめたいならそういう薬物を身体に投与したまま放置し続けるくらいのことをしなけりや僕は泣き叫ばないぞ！」

負け犬の遠吠えに等しい出来杉の声にいちいち反応を示す者はいない、大柄な男たちは何ひとつとして言葉を発しなかった。

執行の場には幼馴染みたちがのび太を除いてみんな揃っていた、出来杉はそんな状況であっても高慢な態度を崩すことなく全員を睨み付けたまま笑った。

「少しは考えたようだがまだまだ大したことないなあ！所詮は凡人の考えれる範囲でしか残虐な行為に走れない、小さい小さい小さい！だからお前らに虫酸が走ってたんだよ！つまらない今に満足しきって」

「黙れ」

スネ夫の一声で出来杉の口は閉じられた、出来杉は自分の意思ではない様子で慌てふためく。

「なんでかわからないだろう？お前の身体には命令された内容には絶対服従の状況に陥る薬物を投与してある、というか日々の食事に含まれていたんだ」

「・・・・・・！」

「とりあえずお前はもう喋るな、耳障りだ」

大柄な男たちは出来杉の拘束衣をほどくと、スネ夫の言葉に言い様のない恐怖を覚えた出来杉は急に暴れだした。

何をされたかわからない恐怖は出来杉の身体の奥底から沸き出てくる、出来杉の抵抗むなく出来杉は電気椅子に縛り付けた。

「~~~~~！！」

「怖いだろ？お前の実験の犠牲になった連中はみんなそう思って死んでいったんだ」

思い知つとけ、スネ夫がそういうと同時に出来杉の目に布が巻かれる。出来杉の呼吸は恐怖で荒くなり汗が全身から流れ出る、口には舌を嚙んで自殺しないように大きな布を入れられる。

血が引いていくどころか冷めていくような恐怖、背筋から背骨を引き抜かれたかのような感覚が全身に走る。

これが死の恐怖か、出来杉の身体に命を奪うに値する電流が走った。

出来杉英才（後書き）

暗いですよね、明るくなるのはたぶんないかもしれません

源静香（前書き）

暗いのが嫌になったので短いです

源静香

「はぁ・・・・・・・・・・」

心中穏やかではない、かつての仲間死を宣告するだなんていつから自分は最低に成り果てたのだろうか。

「私も罪人だったのに・・・出来杉君だけが・・・死ぬ」

罪、静香の心に重くのしかかる言葉。ずっしりとした重みは静香を殺しかねないほどだった。

「醜い・・・今の私はこれ以上にないくらいに醜い・・・」

息をつく静香、彼女がこれから背負っていかねければならない罪はあまりにも重い。それを一心に受けていくことが彼女の償いなのだ。

「ああ・・・願わくば・・・」

誰か私を殺してください、誰にも届くことのない願い事を呟いた。

彼女はこれから死にたいと思いつながら日々を生きていかねければならないのだ、寿命がくる、その日まで。

源静香（後書き）

そろそろ明るくしたいな・・・

骨川スネ夫（前書き）

こんなに暗くする必要があったのだろうか・・・

骨川スネ夫

悲しくなかったと言ったら嘘になる、スネ夫は今でも出来杉のことを仲間だと思っているし痛めつけるところか死刑だなんて信じられなかった。

「俺にやらせてくれ・・・出来杉には俺が引導を渡したい・・・」

自ら引き受けた憎まれ役、苦しいながらもスネ夫は出来杉に自分が今まで思っていたことを、厳しい口調で伝えた。

「・・・・・・・・」

「スネ夫さん・・・・・・・・」

静香が全てを終えたスネ夫の元に寄る、スネ夫は処刑の終わった部屋でいつまでも座り続けていた。

「スネ夫さんに非はないわ、悪いのは全て出来杉さんよ」

「・・・・・・・・かな」

スネ夫は静香に聞こえないくらいに小さな声で呟いた。

「みんなが幸せになれて笑い合って・・・そんな方法は本当になかったのかな・・・？」

「・・・・・・・・スネ夫さん、どうやったところで悪に走る人間が悪に走った理由は様々であれ、その人間に人間らしい弱さがあったからだと私は思うわ」

「人間らしい・・・弱さ・・・？」

「そう、ほとんどの人間はそれにめげることなく日々を生きていく。でも時として多大なストレスに耐えることができなくなった人間は弱さへ脱線するの」

「脱線・・・出来杉も脱線したんだな・・・」

「彼の抱いていたストレスは非常に些細で小さくて普通の人間なら端にもかけないものだったけど高すぎたブライドが彼を意味不明な復讐劇にかりたてたの」

静香はスネ夫の肩に手を置いて隣に座った。

「あなたはあなたのやるべきことを終えた、それは立派なことよ」

骨川スネ夫（後書き）

短いし・・・

緑川聖奈（前書き）

ちよつとは明るくなつたかな？

緑川聖奈

無力、聖奈を強くしたのはあの時の無力感だった。

隣で仲間があつさり死んだあの時、聖奈は強くなろうと誓った。元々陸上部だった聖奈にはそこそこの運動神経となかなかの戦闘センスを持ち合わせていたため彼女はすぐに強くなった。銃の扱いどころか自作で銃を改造するなどメンタルとフィジカルにおいて最も成長が見られたのが聖奈だった、誰よりも早く動けて速攻が可能でほとんどの攻撃も躲せる。そこまで異常なまでに強くなったのは安雄の死のシーンが夜の度に夢に出てきたからだ。

不用意に見たことのないB・O・Wに近づく安雄、顔に硫酸のような液体をかけられ悲鳴を上げることなく倒れた安雄、その横で何も出来ずに呆然としていたあの日の自分。

「もーやだー・・・来る日も来る日も安雄君の事ばかり考えて・・・好きだったのかな？」

「誰が誰を」

「安雄君が私を」

「お前そろそろ精神科の世話になった方がいいかもな」

「いや、ひょっとしたら安雄君の生き霊が私の後ろら辺をこっ・・・」

「やっぱり精神科の世話になれ」

スネ夫のツツコミは相変わらずキレキレだった、ツツコミそのものの冷酷さや切り口はシリアスな展開を経験しても錆び付いていなか

った。

「なえスネ夫君」

「なんだよバカ」

「もういいのかな？」

「なにがだよ」

「安雄君の事」

「………何時のこと言っただよ」

「私にとっては昔の事じゃないんだよ、いまでもリアルな映像を見続けているからもう辛くて辛くて」

「そうかよ、本当に精神科で相談したらどうだ？ボケとかじゃなく」

「うーん、精神科とかいったらなんだか頭がおかしい人だと思われる………」

「それはお前の偏見だしお前は充分頭がおかしい」

スネ夫はやはりツツコミ担当だった。

「ちよくちよく挟んでくるな、俺がツツコミだって」

「スネ夫君って精神的にタフだからね」

「あまりこの話においてのタフって言葉は褒め言葉じゃないような気がするな………」

スネ夫は遅ればせながら持ってきたコーヒーを聖奈の前に置いた、
聖奈はそれに手をつけることなく言った。

「私ジューズがいい！」

「お前本当は引き摺ってないだろ！」

緑川聖奈（後書き）

そろそろ暗黒ゾーン脱出？

ジャイアン（前書き）

あの頃ですね、これを機に読み返してみるのもいいかも・・・

ジャイアン

意識を取り戻す直前、ジャイアンは二つの声を聞いた気がした。一つは遠くで誰かが自分を呼んでいるような声、もう一つは近くで自分に囁く声だった。

(?.....誰なんだ?)

「よう.....」

囁いている声の主、ジャイアンの目の前にはガキ大将を気取っていたあの頃の自分がいた。

「ずいぶんつまらない体たらくじゃないか.....」
(うるせえ、こっちの身にもなってみろってんだ)
「はん、かつてのガキ大将も今や磔の形効か」

昔のジャイアンは今のジャイアンですらないような憎たらしい表情になった。

「お前の精神力はそんなチンケなものなのか？」
(この状況に精神もへったくれもあるか、自由が効かねえんだからよお)

「二流の言い訳だ」

「お前は殺されそうな状況で銃がないからと言って大人しく殺されるのか？ 腹が減っていたら飯がくるまで指をくわえるだけか？ 違うだろう、かつてのお前、とどのつまり俺は違つた。困難には正面からぶつかつてきたあの頃、情けないスネ夫を叱り飛ばしたあの情熱はどこへ失せた？」

「起きろ　今のお前はみつともなさすぎて目も当てられん」

昔の自分とは明らかに違う口調　奇つくジャイアンを見て昔のジャイアンはニヤリと笑った。

（闘志だと？それならずと昔から火がついている。燃え上がってはいただよ）

「じゃあなんでもつと燃やさない？ウィルスに冒された身体から精神を解き放つくらいの気概を見せてみるよ」

「いいぞ、その意気だ！お前を縛り付けている目には見えないウィ
ルスの鎖を引き千切れ！」

ジャイアンはいつまでも自分を呼んでいる遠くの声に応えた。

「……………とっくに聞いてるぜ」

ジャイアン（後書き）

半分ってところでしょうか

ドラえもん

どうやったらこんなに鈍感になれる？

ドラえもんの脳内には一時それだけの言葉しかなかった。だがのび太さたった数時間で大人になっていたらしいとてもことに気づかされた。

「昔ののび太君とは大違いだなあ……………」

なんというのか成長とは違う、進歩というのが正しいような気がする。静香を大した理由もなく好き好き言っていたあの頃とは明らかに違うのび太に進歩していた。

「はあ……セワシ君……君の心配していたのび太君は立派になつてしまったよ」

もう僕はきつと必要ないな、そう呟きながらも歴史の流れから消え去ってしまったかもしれない恩人に話しかけた。

廃棄処分されかかったあの頃、守るべき者ができたドラえもんは躍起になってセワシに尽くした。甘やかしすぎたかもしれないがとにかく全力を尽くした。お世話ロボットとしての責務を果たそうと一生懸命だった。

時は流れてセワシの子孫をお世話しに過去へ行くことになって、今度はどうしようもないくらいにダメダメなのび太に尽くした。

あの時の毎日帰ってくる度に泣きついてきた少年は今や人類を率いるリーダー的存在である、ドラえもんには感慨深いものが胸にあっ

た。

- - のび太君 - -

- - 君が僕を必要としなくなったら - -

- - こっそり僕のスイッチを切ってくれないか - -

いつか言った本心、十分に成長したのび太は少しの間困ったような顔になってからすぐ答えた。

- - 僕たちは友達だろ？ずっと一緒に何が悪いんだい？ - -

それに今の君は僕以外からも必要とされてるんだから、そう言つとのび太は笑った。

「はぁ・・・長い付き合いだけど・・・本当に優しいよ、のび太君は・・・」

誰からの愛情も嫉妬も怒りも全て拒否せず受け止める、この上ない

無限大の優しさ。

「留守を守るのは僕たちの仕事だ……」

ドラえもんは遠くに見えなくなった3つの人影の消えた方向から目をそらして建物の中に戻って行った。

ドラえもん（後書き）

もつそろそろ終わりです

のび太・そして二人（前書き）

やっと主人公が！

のび太・そして二人

無限に広がっているのだろうかという荒野はようやく終わりを告げていた。ただ目の前に広がっているのは精神的に疲れる荒野ではなくただただヤバイものだった。

「これは……………」

額に大量の汗をかきながら瑠璃が呟く。それとは対照的に無表情のまま瑠璃の妹のような少女は答えた。

「ジャイアントスパイダーの巣窟でしょうね」

おそらくは生き残っていたB・O・Wが住み着いて繁殖したのだろう。辺り一面は大蜘蛛だらけだった。

「ちょっと……………帰るにはここ以外に道はないの、のび太？」
「あるではあるんだけどかなり遠回りになっちゃうね。二週間くらいはかかるかな」

三人は現在、一週間ほど前から日本支部への帰路についている。そのためにはこの大量のジャイアントスパイダーが巣としているこの渓谷を通らなければならない、ちなみに三人には武器らしいものをひとつとして所持していない。常人離れしている三人であっても困難極まりない作業である。

「どうしよう……………この数は私達でも難しいよ……………」

「冷静に考えたらここを犠牲無しで通り抜けることは不可能でしょう」

「はぁ・・・旅を始めて7ヶ月・・・殺生はしないと決めていたのになぁ・・・帰り際で破ることになるなんて虚しいなぁ・・・」

「・・・僕がやろう、二人はゆつくりついてきてくれ」

「!？」

「冷静に考えたらそれは自殺行為にしか思われません」

のび太は二人の目を見て微笑んだ。のび太は二人を見ながらジャイアントスパイダーにゆつくりと近づいて行く。

「のび太!？あんたちよつと死にたいのっ!？」

「大丈夫・・・僕の推測なら・・・彼らは攻撃してこない・・・はず・・・」

「はずって!早く戻ってよ!」

のび太はゆつくりとジャイアントスパイダーの群れの中に入っていく。本来ならばT・ウィルスに犯された生物は本能に従って補食行為に走る、それは昆虫であろうと哺乳類であろうと変わらない事実で不変のものである。

だが、ジャイアントスパイダーは一匹ものび太に襲いかかってこない。それどころか興味すら示していなかった。

「・・・!」

瑠璃は目の前の光景が信じられなかった、今までB・O・Wが人間が近づいて攻撃をしかけないだなんて経験がない。しかしそれは

目の前で実際に起こっているのだ。

「きっとウィルスは長い年月を経たせいで薄れてきたんだよ、確証はないけどね」

おいで、そう言つてのび太はゆっくりながらどんどん先に進んでいく。二人は急ぎ足になって後を追った。

「帰ろう、帰るべき所へ」

のび太・そして二人（後書き）

次が実質最終回です

哀川潤（前書き）

これで終わります

哀川潤

なんともない、きつとなんともないはずだ。

哀川潤はそう思い続けていた。のび太なんていなくても生きていく、そう思っていた。

「しかしなんでこんなに寂しいんだろう・・・どうして・・・？」

明らかに強がりだった。彼女はのび太がいなくなつてからの7ヶ月間、戯言使いのいーたんや根無し草な親父に会いに行ったりして暇を潰す毎日だったのだがやっぱり心のどこかでは空虚な感情が渦巻いていた。

「なんで・・・どうして・・・」

彼女自身その理由はわかつていた、だが会えない時間は彼女を昔のように頑な彼女にしてしまっていた。哀川潤は案外寂しがりやないだ。

「ああ、会いたいよ・・・のび太・・・会いたいよ・・・」

愛しい男の名前を、彼女が久々に呼んだ。

「・・・フリ・・・ですか？」

のび太は彼女の後ろで問いかけた。

「!？」

「いや、そんな風に『気付かなかった!』っていうリアクションをかまされても」

困っちゃいます、そう言いながらのび太は恥ずかしそうに頭をかいた。

「のび・・・太あ・・・」

「・・・・・・潤さん、ただいま」

「・・・・・・バカ野郎」

おかえりなさい、彼女は下を向きながら恥ずかしそうに言った。

「いいなあ・・・みんなののび太を独り占め・・・」

「のび太は今まで誰かにずっと尽くしてきたのです、そろそろ誰か一人に献身的に尽くす時だったのですよ」

二人の姉妹は淡々と、しかし残念そうに呟いた。

「あんたはこれからどうするの？」

「私は・・・邪魔でなければ彼らと共に復興作業を・・・」

「じゃあ私もそうするわ、のび太が誰かのものになった以上、私にやることなんてないわけだし」

「・・・悔しいですが同感です」

慣れない風に、そしてやっぱり恥ずかしそうに抱き合っている二人を遠くから眺めながら姉妹は笑い合った。

哀川潤（後書き）

次の話は後書きです

後書きらしきもの

短編、といっても短すぎました。

今回この短い小話をたくさん並べただけの話を見返してみると、

「あー、急いで書きすぎた……」

そう思うシーンが多々ありました。やってしまったなという部分やもつと時間をかければよかったと思った部分など、書き上げだしたらキリがないです。

でも人って不思議なことにあれほど熱中していた事柄を忘れてしまふんです、忘却の感覚を覚えた私はとりあえず

「早く早く早く！」

その一心でこの短編集を書き上げました。

読んでくれた方、ありがとうございます。スランプに陥ったmakiの力となったのは読んでくれた方々の感想やアクセス数など、いくらもらったか覚えきれません。

この作品はたくさんの人に支えられてきたので、のび太もまた誰かを支えてほしかった、だからのび太をあそこまで優しくしたというわけなんです。

できることならば、次の連載でお会いしましょう。ミステリー、かな？

後書きらしきもの（後書き）

語愛読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9297n/>

あの日の続き

2010年10月9日12時53分発行